

Charles Dickens と子どもの主題

岡崎 昭子

序 文

Charles Dickens (1812-1870) は児童文学の観点から見ても、重要な作家である。もちろん、彼が直接子どものために書いた作品は、あまり多くない。1976年に復刻されたガーランド・シリーズ¹⁾のなかには、Dickens の *A Holiday Romance* が入っていて、その Preface に彼の子ども用の作品がリストアップされているから、それらをタイトルだけ掲げてみる。

Bibliography of His Books for Children:

Christmas Books

A Christmas Carol (London, 1844)

The Chimes (London, 1845)

The Cricket on the Hearth (London, 1846)

The Battle of Life (London, 1846)

The Haunted Man and the Ghost's Bargain
(London, 1848)

The Life of Our Lord (London, 1934)

A Child's Dream of a Star (Boston, 1871)

A Child's History of England

(London, 1852-1854)

A Holiday Romance (London, 1869)

このなかで一般に知られているのは、クリスマス・ブックスの *A Christmas Carol* と *The Cricket on the Hearth* くらいであろう。やはりクリスマスのための作品に、1850年から1867年にかけて書かれた20編の *Christmas Stories* があるが、どういふわけか、上の Bibliography には入っていない。けれどもそれは、ここではあまり大きな問題ではない。というのは、本稿では Dickens の子ども用の作品だけを扱うつもりではな

いからである。Dickens にとって、子どもの問題 — とくに貧しい子どもの救済問題は、彼の生涯のテーマであった。*Oliver Twist* (1838) は、あとで述べるように、はじめて子どもを主人公にした文学作品として注目されているが、Dickens はこの小説で、偶然に子どもを主人公にしたわけではない。彼の主要作品を考えてみても、歴史小説や特殊な内容のもの以外は、ほとんどの作品で子どもの福祉や教育問題を提起しているし、貧しい子どもが主要なキャラクターになっている。それほど当時の社会では、貧しい家庭の子どもたちや孤児がひどい状況におかれており、正義漢の Dickens がそれを放っておくことができなかつたのだともいえるが、それだけではなからう。彼はまるで憑かれたように子どもの救済問題を作品でとり上げて、多忙な生活の時間をさいて講演旅行に出かけている。その活動があまりに熱心だったために、彼の人柄をよく知らない人たちは、Dickens を social reformer として毛嫌いしていたという²⁾。

このような社会悪に対する Dickens のはげしい怒りは、自分の少年時代の苦勞が原因であるといわれている。1824年、父親の John Dickens が負債のためにマールシー刑務所へ入れられ、12才の Charles は靴墨工場で働かされたのであった。そのときの苦しみと屈辱で深く心が傷つけられ、当時の生活については、妻にも語ろうとしなかつた。そのかわり、たえず作品で子どもの問題をとり上げて、社会に訴えたわけである。

さらに彼がいつも子どもに無関心でいられなかつた理由は、彼自身10人の子ども³⁾の父親だったということである。子ども好きの彼は、原稿の期日に追われながらも、子どものパーティには顔を出して、手品をしたり、即興の寸劇をしたりして子どもたちを喜ばせた。無邪気な人だったので、子どもと同じように驚いたり、喜んだりし

1) "Classics of Children's Literature", ed. by Alison Lurie and Justin G. Schiller (Garland Publishing Inc., 1976)

2) *Christmas Stories*, Introduction by Margaret Lane (Oxford Illustrated Dickens.)

3) Dickens は妻 Catherine との間に7男3女の子どもをもったが、9番めの Dora Annie Dickens (1850-51) だけは、早逝した。cf. Allan Grant: *A Preface to Dickens* (Longman Group Ltd., 1984)

たようである。当然、子どもの心理がよく理解できたであろう。

このように Dickens と彼の作品は、子どもと深い関わりをもっている。つぎにそれが、どのような形で彼の生活と作品に表われているかを考察し、結果として彼が児童文学にどのような貢献をしたかを調べてみる。

子どもの作品となった *Oliver Twist*

Dickens はひじょうに早く有名になった。出世作 *The Pickwick Papers* は、1836年3月から毎月分冊の形で刊行されたが、その第1号が出た直後に結婚した彼は、まもなく新妻とゆっくり過ごす時間もないほど多忙になってしまった。*Oliver Twist* はその翌年、Dickens 自身が編集を引き受けた雑誌に連載され始め、*The Pickwick Papers* と同時進行の形で書きすすめられていった。

Oliver Twist は児童文学の分野では、はじめて子どもを主人公にした文学作品とみなされている。孤児オリバーが養育院の苛酷な扱いに耐えかねて逃亡し、ロンドンの下町で窃盗団に捕まって辛酸をなめるが、最後まで正しい心を失わず、ついに善意の人たちに救われるというこの作品は、当時の貧民救済法の無力を世間に知らせて、養育院その他の施設の不備のために孤児や貧民の子どもたちがどんなに苦しんでいるかを暴露するために書かれたという。たしかに、ロンドンの貧民街の描写は、ホガースの絵を見るようだし、窃盗団の一味である少女ナンシーが、オリバーを逃がしたために虐殺される場所など、背筋が凍るほどリアルに描かれている。

にもかかわらず、*Oliver Twist* はいつのまにか子どもに親しまれる作品となった。映画やテレビで放映され、舞台にかけられ、ミュージカルにまでなった⁴⁾。けな気な少年オリバーの生き方が、子どもの共感をよんだこともあろう。かつて、*Robinson Crusoe* や *Gulliver's Travels* が、作者の意図から離れて、子どもたちの愛読書になったのと同じような現象が *Oliver Twist* におきたわけである。

学校教育への告発

つぎの作品 *Nicholas Nickleby* も、*Oliver Twist* が完成しないうちに書き始められた。同じころ *Barnaby Rudge* の原稿も出版社に渡す約束であったが、さすがの Dickens も悲鳴をあげて、そちらの締切りは延ばし

てもらったようである。それほど追いつめられた状態にありながら、*Nicholas Nickleby* を書くに当っては、実地調査のためにヨークシャーを訪れている。それは、この小説の序文で彼が述べているように、ヨークシャーの学校で小さい子どもたちがどんなに虐待されているかを公表して、児童の教育が社会問題としてとり上げられるために、この作品が書かれたからであった。

この悪名高い“*The Yorkshire schools*”は、18世紀の後半に設立されたものが多く、経済的に恵まれない家庭の子どもたちが入れられていた。しかし彼らの両親は、子どもを邪魔者扱いしてこの学校に入れたわけではない。比較的安い費用で、長期間にわたる寮生活によって、勉学も生活上のしつけも徹底させるという宣伝文句にだまされたのであった。

1838年に Dickens が訪れたのは、Bowes Academy という学校であった。1823年、ここで学童の虐待事件があり、少年数人が失明した。立腹した親たちは校長を告訴し、裁判ざたとなった。証人として出廷した少年のことは、引用する価値があろう。

「学校には、260人から300人くらいの少年がいました。馬が水を飲む物のような、細長いカイバ桶のなかで皆いっしょに顔を洗い、夜は、余り大きくない一つのベッドに、4人か5人がもぐって寝ていました。学校全体で、タオルは2枚しかありませんでした。石鹸があるのは、日曜日だけでした。……ポットに入ったスキムミルクが「スープ」とよばれて、日曜日のお茶のときには、それを飲まなければならなかったのです。……」

陪審員の評決は、当然責任者の校長に不利で、彼は賠償金を支払わなければならなかった。にもかかわらず裁判長は、校長 (Mr. Shaw) の学校運営全搬については、問題にすべき点はないと断定したのである。一般の人たちは、この裁決をショッキングなものとは思わなかったのであろう、1838年に Dickens が訪れたときも、この学校は結構入学者が多かった。このような事実直面して、Dickens がどんなに憤慨したか、容易に想像される。彼は Bowes Academy のそばの墓地を訪れて、19才で急死した Wiltshire 出身の少年の墓に詣でた。この少年が、*Nicholas Nickleby* に登場する精薄の少年 Smike のモデルになったといわれている。

4) Dickens の作品で映画やテレビ化されたものは、1983年までに101篇あったと Mike Poole は記している。cf. Robert Giddings ed. *The Changing World of Charles Dickens* (Vision Press, 1983). *Oliver Twist* は、それがもっとも多い作品の一つ。

Nicholas Nickleby では、「子どもの受難」のテーマが、*Oliver Twist* よりもっと広い、社会的なパースペクティブから描かれている。ほとんどすべての子どもや若者が迫害され、苦悩している。さらにこの作品では、親子の問題が加わっていることも見逃せない。本当の父や母がいるのに、どうして子どもがそれほどまでに苦勞しなければならぬのか。それは身勝手な親が多いからである——そう Dickens は考えていたようである。たとえば、*Nicholas* の母親 Mrs. Nickleby はお人よしで憎めない人物ではあるが、自分の社会的地位を高めるためには、簡単に娘の恋をあきらめさせ、Sir Mulberry と結婚させようとする。

小説構成の上からは欠陥が指摘されることもあるけれども、*Nicholas Nickleby* は登場人物のキャラクターがすべて面白く、短気な主人公の行動（陰剣な校長をなぐりつけたり、女たらしの Sir Mulberry をはり倒すなど）にも共感されるらしく、人気がある⁵⁾。日本では余り知られていないが、英語圏の国では子どもにも *Oliver Twist*, *A Christmas Carol*, *David Copperfield*, *A Tale of Two Cities* とともに、もっともよく読まれている。

薄幸の少女のイメージ

文学者としての地位が安定した Dickens は、長編小説を連載するだけでなく、短編やエッセー、社会時評、戯曲、書簡集など、何でも自由にのせることのできる自分の雑誌がほしいと考えた。こうして1840年4月、*Three-pence Weekly* という週刊紙が創刊されることになった。これに掲載されたものが、のちに長大な *Master Humphrey's Clock* 全3巻としてまとめられたわけであるが、そのなかに *The Old Curiosity Shop* が入っている。

この小説で、はじめて Dickens は可憐な少女を主人公にする。心やさしいその少女 (Little Nell) と祖父が、当世風にいえば「サラ金」に追われて逃げまわり、ようやく田舎の教会の近くに住むことができるようになるが、少女は心労のあまり、やつれ果てる。そして祖父の兄弟が老人と少女を救おうとしてやってきたとき、哀れな少女は小さなベッドで死んでいた。老人のあとにつづいて、彼の兄弟たちも、そっと少女の部屋へ入って行

く。そのとき人々の間から、すすり泣きの声が聞こえた。

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. …… 中略 ……

She was dead. Dear, gentle, patient, noble Nell was dead. Her little bird — a poor, slight thing the pressure of a finger would have crushed — was stirring nimbly in its cage; and the strong heart of its mistress was mute and motionless for ever.⁶⁾

(彼女は死んでいた。これほど美しく、穏かな眠りはなかる。苦痛の跡がすこしもなく、見るからに美しい。神の手で創られたばかりの姿が、これから呼吸が始まるのを待っているようだ。いままでこの世に生きていて、死んだものとは思われない。… 中略 …

彼女は死んでいた。いとしい、優しい、忍耐づよい、気高いネルは死んでしまった。彼女の小鳥は——指一本で押しつぶされそうにかよわい小鳥は、鳥籠のなかですばやく動きまわっていた。けれども小鳥の持ち主の強い心臓は沈黙し、永遠に動かなくなってしまった。)

この Little Nell の死の場面は、Dickens にとっては少しセンチメンタルなくらい綿々と描写されている。それは、よく言われているように、Dickens が Little Nell の死に、自分の妻の妹 Mary Hogarth の死を投影させて描いたからかもしれない。17才で急逝した Mary は、ちょうど少女 Nell のように清らかで優しく、Dickens の心の支えになっていた。自分の腕に抱かれて息たえた Mary の死⁷⁾ は、Dickens の心に生涯消えぬ影をおとし、以後彼の作品に、心優しい薄幸の少女が現われるようになる。

The Old Curiosity Shop は、Dickens 前期の作品のなかではよく纏まった佳作であり、一般の人気も高い。けれども子どもの間では、それほど親まれぬのは、なぜであろうか。*Oliver Twist* や *Nicholas Nickleby* と同様、子どもが主人公になってはいるが、心が美しく可

5) 1982年、Royal Shakespeare Company による上演は大変評判になり、BBC テレビでも放映された。(脚色は David Edgar) ……

6) *The Old Curiosity Shop* (1841), Chap. 71, p. 492 (Collins, 1953年版)

7) Mary Hogarth が死んだのは、1837年5月7日であった。

憐な少女が最後まで苦勞して死んでしまうという物語は、希望がないから子ども向きではないのかもしれない。子どもの文学は、なるべく happy-ending がよいといわれている。

永遠のクリスマス・ブック

つぎの年、つまり1842年1月に、Dickens 夫妻は4人の子どもを残してアメリカ旅行をおこなった。Washington Irving から *The Old Curiosity Shop* を激賞されて、新大陸への夢を抱いて旅立ち、熱狂的な歓迎を受けたけれども、結局はアメリカに失望して帰国した。家に帰ってから、子ぼんのうの彼は久しぶりに再会した我が子に、童謡を歌ってやったり、本を読んでやったりして過ごしたようである。

A Christmas Carol の構想が頭にひらめいたのは、翌1843年、マンチェスターへ講演旅行に出かけたときであったという。このときの講演も、教育改革と貧しい子どもの救済を訴えるためのものであった。当時の Dickens はスランプで、執筆中の *Martin Chuzzlewit* も遅々としてすすまず、真夜中にロンドンの街を歩きまわって考え込むことが多かった。そのとき見たロンドンの夜の風景が、*A Christmas Carol* のなかに生き生きと写し出されている。

“永遠のクリスマス・ブック”といわれるこの作品は、日本では Dickens の唯一の児童書のような扱い方がされているようであるが、Dickens は子どもだけのために書いたわけではない。最初は、「小説に失望して離れていった読者」をとりもどそうという意図で書かれたのであった。ジャーナリストとして出発した彼は、たえず読者を意識し、読者の共感を得るような手法を考えていた。パンチ画家として有名だった John Leach のイラストレーションをこの本に使うことにしたのも、その一つである。初版は製本にもお金をかけ、内容・装丁とも、クリスマス・シーズンにふさわしいものにするように努めた。Dickens にとって、このような種類のものを書くのは初めてであったが、彼は俄然気分がのってきて、1カ月足らずのうちに書き上げている。

守銭奴の老人 Scrooge が、クリスマス・イブに幽霊の案内で自分の過去・現在・未来を見せられて反省し、改心するというテーマは、それだけでクリスマス・シーズンには十分な意義がある。このような Dickens の信

仰心や博愛精神に、小説家としてのすぐれた技法——語り口や性格描写のうまさ、無理のないプロットのすずめ方、緻密な風景描写などが加わって *A Christmas Carol* は、かつてないほど大きな反響をよんだ。この本の書評を書いた Thackeray は、“God bless him!” といったし、Robert Louis Stevenson は、手紙でつぎのように書いた。

I wonder if you have ever read Dicken's *Christmas Books*? …… I have only read two yet, but I have cried my eyes out; and had a terrible fight not to sob. But oh, dear God, they are *good* — and I feel so good after them — I shall do good and lose no time — I want to go out and comfort someone — I *shall* give money. Oh, what a jolly thing it is for a man to have written books like these and just filled people's hearts with pity⁸⁾.

(ディケンズの「クリスマス・ブック」をお読みになったでしょうか？ 私はまだ2篇読んだだけなのですが、目を泣きはらして、すすり泣きに耐えるには大変な努力が必要でした。けれども、おお神様、あの本は実にすばらしい。私はあの本を読んだあと気分がとてもよくなって、何かよいことをすぐにしたくて、外に出てだれかを慰めたい、お金を上げたい。おお、こういう本を書いて、人々の心を慈愛で満たす人は、なんと楽しいことでしょう。)

ここで R. L. Stevenson がいっている「2篇」というのは、Michael Slater も指摘している⁹⁾ ように、*Carol* とその翌年のクリスマスのために書かれた *The Chimes* に相違ない。*Carol* がクリスマス・イブの幻想であるのに対して、*The Chimes* はニューイヤー・イブつまり大晦日の夜の夢である。原題は *The Chimes* のあとに、*A Goblin Story of Some Bells that Rang an Old Year Out and a New Year In* (古い年を送り、新しい年を迎えて鳴りひびいた鐘の精の物語) と説明がついている。貧しい老人 Toby Veck が、鐘の精に導かれて自分の娘が不幸になった姿を見る。けれども結局それが夢であり、娘は幸せそうに自分の結婚衣裳に刺しゅうをしているのを見出して狂喜する、というのが表面的なプロットであるが、実際にはこれは政治諷刺のため

8) *The Christmas Books* (Penguin Classics) Vol. I, Introduction by Michael Slater, p. vii.

9) *Ibid.*

に書かれたのであった。Dickens は、ビクトリア朝の繁栄のかげに苦悩する貧しい人たちや、金持ちの紳士の横柄な態度を目に見えるように描いている。

The Chimes が1843年のクリスマスに書かれたその翌年、工場労働法が議会を通過した。女性の労働時間を1日12時間以内に、8才から13才までの子どもは6時間半以内に制限するというものである。ということはそれ以上の重労働が強いられていたわけである。*The Chimes* がこの法案の成立にどれだけ影響を与えたかはわからないが、一家でイタリアに滞在中であったのに、Dickens はこの作品を友人たちに朗読して聴かせるために、急拠ロンドンへ帰ったほどであった。

さらに後になって、Dickens が自作の朗読会¹⁰⁾をさかんにおこなうようになったときも、*The Chimes* は *A Christmas Carol* について、もっとも多くとり上げられるレパートリーになったのであった。

知られざる児童書

クリスマス・ブックスを書きながら、Dickens は自分の息子 Charley のために 歴史物語を書きたいという欲求にかられたようである。1843年、当時6才だった長男が、史実の正しい評価ができないまま、くだらない英雄に共鳴したり、戦争のはなやかな勝利にのみ目を奪われて、人間らしい優しい心を失うのではないかと心配して、その心情を手紙で訴えている¹¹⁾。しかし、この希望は、多忙なために1851年まで実現しなかった。

のちに *A Child's History of England* としてまとめられた英国史の物語は、1851年1月号から *Household Words* に連載された。前年から Dickens が編集してい

た週刊紙である。けれども、*David Copperfield* を執筆しながら、週刊紙を編集し、その記事も書くという殺人的なスケジュールのなかでの仕事である。机に向かう時間もないときには、妻の妹 Georgina に口述筆記をしてもらうこともあった¹²⁾。このような無理な状態で書いたために、B.C. 50年から1837年までのイギリス史の本は、結局 Dickens 自身満足できるものにはならなかった。我が子にも、大きくなったら、もっと立派な歴史の本を読むように、といっている。

Household Words には、もう一つの副産物があった。20の「クリスマス物語」である。*Christmas Stories* として知られるこれらの物語は、第1作 *A Christmas Tree* (1850) から *Going into Society* (1858) までの11編は *Household Words* 紙に、*The Haunted House* (1859) から *No Thoroughfare* (1867) までの9編は、その後つづいて出された *All the Year Round* 紙に連載された。クリスマス・ブックスに比べると短く、内容的にもわかりやすいものが多い。それは Dickens がこれらの物語を家庭内の読み物として大人にも子どもにも楽しめるように書いたからであった¹³⁾。

内容的にはシンプルであるとはいっても、第1作が書かれた1850年は、Dickens が代表作 *David Copperfield* を完成した年であり、小説家として頂点に達した時期である。したがって、円熟期の Dickens が17年間にわたって書いたこれらの物語は、Dickens の心の軌跡をたどる意味でも、軽く扱ってはならないものであるが、この中には Dickens が公開朗読会でとり上げた物語が多いので、続稿でその観点から考察する。

10) Dickens は1853年のクリスマスから自作朗読を始めて、死の3カ月前までつづけた。公開朗読会は472回。冷静な Thomas Carlyle さえ、Dickens の朗読は当時のシェイクスピア劇の名優 W. C. Macready よりもうまいといったそうである。cf. Charles Dickens: *Sikes and Nancy and Other Public Reading*, Introduction. (World Classics)

11) 同年5月、*The Illuminated Magazine* に歴史記事が出たおりに、進歩的な編集者 Douglas Jerrold にあてた手紙と、8月に友人 Miss Coutts 宛の手紙。

12) *Master Humphrey's Clock and A Child's History of England*, Introduction by Derek Hudson (The Oxford Illustrated Dickens)

13) *Christmas Stories*, Introduction by Margaret Lane (The Oxford Illustrated Dickens.)